
双子の二人「ファイナル」

レイン氷花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の一人「ファイナル」

【Zコード】

Z9331E

【作者名】

レイン氷花

【あらすじ】

双子の紅と蒼、紅は何かもうかなり体が弱いけど天才！…蒼は運動神経と頑丈さが人間離れしてるけど妹想いな良いお姉ちゃん！！この二人がいれば最凶！？な、日常。

(前書き)

最後です。そして出来が一番気になる作品です。

少し早いですが、

ここまでついてきてあつがと「ハジセコ」ました！

レイン氷花

ドガアーン！！！

「キヤーナ！」

「うわー！」

「？！」

「クククツ…！」

「うふふ～ 何の！ 事かなあ！ ！？」

バリイン!! バキボキ!!

「てゆうか家を」これ以上壊すなあーーー！」

ども、今日は家で涼親子を呼んでのお茶会。こういう事だつたのだが、母さんが暴走して家を破壊するといつ。どうしてこいつなつた?と聞きたくなるような状況に俺達は巻き込まれていて。

「分かつてる。ところで蒼、アレ止められない？」

「無理……」

「オーン……

「やつぱりかあ……」

ガシャーン……

飛んでくる家具を避けながら、俺は必死に思考を働かす。

ドガシャーン……

何故こうなったかは、話を一口くらに戻すと分かる。

昨日の事。

「着いたな……」

「着いたね……」

現在、涼と一緒に涼の母がいる涼の家の前にいます。

「…………きたね……」

「…………きたな……」

「紅から入りなよ。」

「いやいや、私は普通涼からだらう。」

「でも私は男から行くもんでしょう？」

「レディファーストでこの言葉知ってるか？」

「今忘れた。」

「行けや。」

ガチャン

と、ぐだりないコントを涼と繰り広げていると、突然玄関のドアが開いた。

「あ…お母さん…」

「あら、涼帰つてくるのが一度良かつたわね」

「え？」

「少し早いけど、待ち合わせの場所に行きましょうか」

「お、お母さんとの事で話題」

「あり? 紅唇もいたの。」

「だからお母さん」

「一度良かつたわ 折角だから紅君も一緒に来ない？」

「え、あ、はい…」

「お母さん

「じゃ行きましょう」

「……」「……」

涼母は現れると、疾風のよひに話を進めていく。

それは涼ですら止められない程で、俺はそれを只々見つめる事が出来ず、結局俺は何故か待ち合わせ場所とやらへ行く事になってしまった。

「ていうか何故？」

「僕が分かる訳ないでしょ？」

「お前が分からなきゃ誰が分かるんだよ…」

と番氣（さばけ）に話しているが、今涼母の運転する車の中にいる。事でかなりヤバい。

まさかお見合いが今日だなんて、誰が予想出来るよ？

しかも、情報において右に出る者がいない涼ですから知らなかつたらしいし。

恐るべし、涼母つてな感じだ。

「着いたわよー 一人共早く車から出るー」

((ハンション高ナーチ))

と思ひながらも素直に車から降りる一人。

「てかにじつて…」

学校の数倍はあるうかとも思える大きさ、そして無駄に歴史がありそうな雰囲氣がある建物の前に一人はいた。

「図書館…だね？」

そり、図書館…

でも図書館よりも高殿と言つた方が良いくらいのだが。
早く早く～

「 「 …はあ …… 」 」

一人同時に溜息をつき、嫌々ながらも図書館へと入つていった。

てか図書館でやんの？それに俺がいて良いのか…？

「…………」

「まだハイテンションな涼母が、一番奥にあるテーブルから手をふる。

「……一つの間に。」

「…………からうの近くに離れてるのに、一瞬で移動だと？」

「シシ『わのはやめた方がいいよ?』

「涼の通りだな。」

「それに早く行かなことどうなるか分かんないよ?」

「それもやうだな……」

納得し、奥のテーブルの方へと歩く。

「座つて」

「……」

「……」

「……何故向かってゆづりに座るんだ?」

「…………まさか……」

俺が疑問をもち、涼が何かに気付いた時にそいつが来た。

「いや～、すみませ～。ちよつと探し物をしてま…」

「親父…？」

「息子よ…。一体どうこつたと思つたら、ここにいたのか。」

「一体親父はここに何しに来た?」

「…………… やはつ…」

「涼? わたから何を…」

それにせはり、つて…

「やつと来ましたね、竜栄わん。」

「ん? ああ、あなたがお見合、い、の…………」

「つぶふ お久しぶりです。 確か、20年ぶりでしたっけ?」

「し、しそしし朱稻^{シイナ}! ! ?」

…………… しいな?

「な、なななな何故お前がここに…?」

「何故つて…お見合いに決まつてゐるじゃないですか」

「じゃあ今回のお見合には…」

「そりゃ 私の娘とのです 」

「… むし、息子よ。帰るかー。」

「させませんよ 」

と、親父と涼母が話していく頃。

「… まさか涼の母が親父と知り合つたんだって…」

展開についていける。

「ほんと、僕も驚きだよ。」

「てか、俺がお前のお見合いの相手つてのが一番驚いたぞ。」

「そうだね。」

「だからつまり、今回のお見合いは…」

「無じつて事になるね。」

「徹夜した努力は…」

「無駄つて事になるね。」

「…」

「…」

「え、うですか…」

「はあ。」

「ごめんね
？私の計画に付き合わせて

と強引に話を終わらしてきた涼母が、じいじに向かつてきた。

「いや、あの、それは困る…！」

「今度の田曜日遊びに行きますね」

ただただ溜息が出た。

長い長い溜息が出た。

卷之三

11

三

10

10

「じゃあね～」

「さよなら～…」

さて、と…

「親父、大丈夫か？」

「だ…大丈夫だよ…」

いやいや、全然大丈夫には見えないよ。

「で、帰らつか？親父。」

「…ああ、そうだな。」

かくして、その日は何事も起きずに終わった。

そして、問題の口曜日。

丁度昼食を食べ終わった頃に、涼親子はやってきた。

お茶会については事前に母さんに話していた事もあり、最初はなかなか楽しそうに両親と涼母は話していた。

だが、時間が経つにつれ、涼母が親父にベッタリつくなっていた。

親父にその気は無いのだが。

そしてそれが限度を超えた為、母さんがキレたといつ訳で、最初に戻る。

メキメキ！

「紅、逃げるつてのも手だよ？」

涼、逃げても意味なんてないと思うぞ……

なら上める策を考えてくれ」

分が、たゞここで新父はどんじか

卷之三

しゃあ蒼
俺をおふくて新父のとこまで走ってくれないか?」

—OK

蒼が頷くとすぐに俺は蒼に乗る。

「出来るだけ近くに走っててくれ！」

「やいやあ！」

バキイ！！！

前方に向けて地面を蹴り跳躍。

「…蒼上だ…！」

振り下ろされる柱をまた跳躍する事で躱す。

親父のところまで後少し…

ブン…！…！

「前…！」

「ハツ…！」

バキバキイ…！…！

前方から迫る柱を右ストレートで破壊。

そしてそのまま親父の横まで走る。

「親父…！」

「息子よ…！」

親父が振り向き、アイコンタクトをとる。

「よし…蒼、母さんの頭上へ…！」

「ああ…！」

ベキッ……！

「親父こぐわーーー！」

「まかせら息子よーーー！」

そして俺は予め懐に入れておいた薬瓶を取り出し、ふたを取る。

更に親父は母さんの懐へと潜り込み、俺と同じ薬瓶を取り出して上、つまり俺達の方へと投げた。

「蒼、息を止めておけー！」

キュポッ

ふたを開けた薬瓶を下に中身がばらまかれるように投げた。

「つー？」

よし、母さんは薬を完璧に吸つたな。

後は、この親父から賣った薬を嗅がせれば終わりだ……

「すまん母さん、ちよいと眠つてくれ。」「

キュポッ

「んう……」

「ドサ…

「キャッチ成功。」

てか重い…俺力無いから重い…

「つひこなら母さん貸して? 紅。」

「あ、ああ、すまん蒼。」

「で、紅?」

「なんだ?」

「」の惨状どりある?」

「スルーする。」

「それがいいね。ヒーリング、皆はどう?」

「? 埋まってる?」

「…それはつまり、生き埋め?」

「Yes, off course。」

「助けなければ!…!…!」

「とつあえずお前が踏んでる涼を助ける。」

「ありやじゅ、これは失礼した。」

「いいから退いてやれ。」

ズボツ

「気絶しますな。」

「一応あつちの元寝室に寝かせておけ。」

「だね。」

「といひで蒼。」

「？」

「…服が破けて色々見えるぞ。」

「わーお。」

「隠せ。」

「紅になら見られてもいいよ。」

「駄目だ。」

「何で?」

「それは俺の理性が

「えいっ。」

ムギュ…

「あ、蒼ー急に抱き締めるな！…！」

「良いじゃないか、裸の付き合になんだし。」

「誤解を招くよつた言い方するな…。」

「で、紅…」

「な、なんだ…！」

「胸で挟まれてるよ？頭を。」

ブシャアアアア…

「紅ー？久しぶりに鼻血で倒れたー！？」

あ…意識が…てかこの落ち、久し、ぶ、り…だ…

「紅ー？氣を失うのは早すぎると思つよー！…？」

んな事言つな…これでも、がん、ぱつ…て…い、るんだ…

ガクツ…

「紅ー？」

「とこつ階で、誰がさわみつなり～…」

「紅幻覚まで見えたのーってか誰がさわみつなり～…」

「…

「おーい、紅…？」

「…スウ…」

「寝ちゃつたよ。」

「…スウ…」

「…………僕も寝よ。」

「…………スウ…」

暫くして、もはや廃屋とかした家から、双子の姉弟の安らかな寝息が聞こえてきた。

(後書き)

これが気に入らない人は感想にでも書いて下さい。

以上。

レイン氷花

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9331e/>

双子の二人「ファイナル」

2011年1月27日14時28分発行